

「神様のあわれみへの応答～献身～」

(サムエル記第一 1 章 20 節～28 節)

『それで私もまた、この子を主におゆだねいたします。この子は一生涯、主にゆだねられたものです。』こうして彼らはそこで主を礼拝した。」(1:28)

(ローマ人への手紙 12 章 1 節～8 節)

「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」(12:1)

今日のメッセージ要旨

◎私達は「献身」という言葉を聞くと牧師・伝道者のことと思いがちですが、全ての信徒の方々もそれぞれ置かれた立場での献身者であることを覚えたい。

◎サムエル記第一1章は、サムエルの誕生の記事で始まっている。サムエルの父となるエルカナには2人の妻ハンナとペニンナがいた。ペニンナには子どもがいたが、ハンナには「主が胎を閉じておられた」ので子どもがいなかった(5)。子どもがないのは恥、神の祝福が遠い時代の故に、ペニンナはハンナを蔑んだ。ハンナは心を痛め「主に祈って、激しく泣いた」(10)。その祈りに祭司エリは気がつかず、彼女は酔っていると誤解したが、主には届いていた(11-19)。サムエルが誕生した(20)。ハンナは約束通りに生まれた子を主に献げ、宮に仕える者とした(24-28)、ハンナは主への請願を果たした(11)。主はハンナの心に寄り添い、慰められる(20, 2:10, 21)。2章で感謝の祈りを捧げている。

◎ローマ人への手紙12章以降でパウロは、これまでの教えを踏まえて、このような恵みにあずかったお互いはどのように生きるべきかを教えている。

「神のあわれみのゆえに」。キリスト者生活は神のあわれみで始まり、支えられ、守られ、動機づけられてこそ可能であり、「こうあるべき」という基準を知っているだけでは送れないのです。だから11章も費やして、神のあわれみがどれほどのものかを、パウロは書いてきた。どれほどのあわれみを受けている自分であるかの理解と自覚が、その愛に応えたいとの願いを生むからである。

「心の一新によって自分を変えなさい」(2)。「心を新たにする」とは、今までを振り返り、これで良かったかと思い巡らす。新しい気づき、発見を得る。聖霊がそこ働き、何かが変わっていく。そうすれば、これまでの思い込みも正され、より神の御心に近づける。「献身1(1)も、3節以下の生き方も、内面的変化もたらずのではないのでしょうか。

パウロは自分のことを「あわれみを受けた見本」と告白している(テモテ第一 1:16)。パウロは自分を「罪人のかしら」と告白している。それは自分の罪深さを自覚し、それを赦して下さった神様のあわれみの大きさを明らかにしているのです。彼は基督自らの顕現により回心し、基督を伝える伝道者、牧師、使徒として用いられるようになったことを深く感謝している。そのパウロはテモテのために「恵みと平安」との間に「あわれみ」を加えて祈っているのです。

パウロは神様のあわれみを受けた者がそれに感謝し、応答として身を献げて神様の御心に適った歩みをするようにと勧めているのです。

礼拝を重んじ、神様の御心を追い求めて神様にも仕え、人にも仕える歩みをさせて戴きたい。「実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。…」(哀歌3:22, 23)